

ハルシナイから上流へ④

前回は、明治五年の高畑利宜の記録による、カムイコタンのシキウシバからハルシナイへの丸木舟の空舟の引き上げ方と、高畑の石狩川水源調査を紹介した。

今回は、明治六年五月、開拓使測量長アメリカ人のワッソン (James R. Watson) が、近代的三角測量の基線設置のために、石狩川を遡り、上川の入った件を紹介しよう。

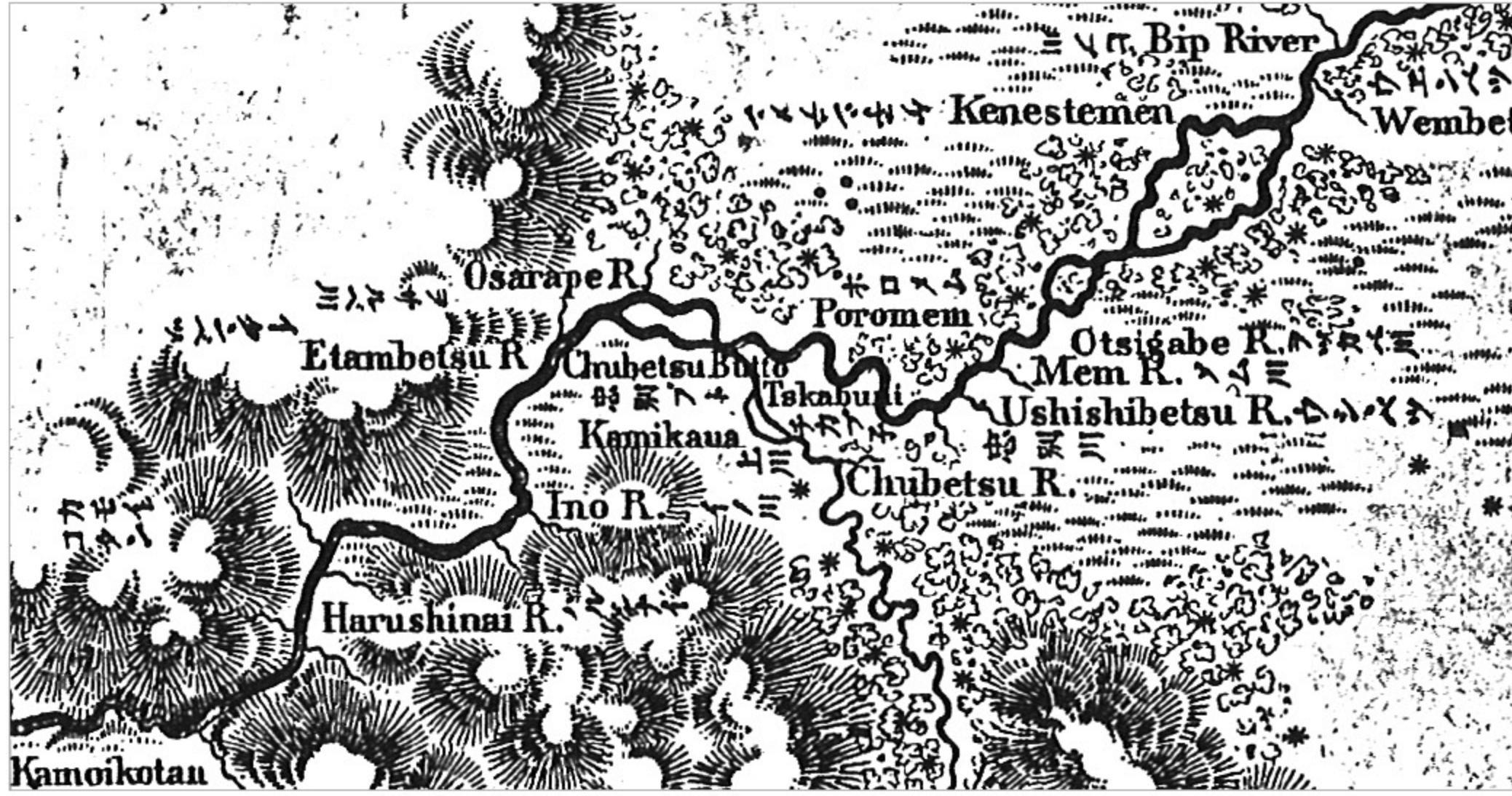
同行は、助手の荒井郁之助、訳官井添、開拓少主典平林通恪、アイヌ語通訳一人で、五月二十六日に札幌を出発する。以下は、平林通恪の『北海紀行』の記事によるが、本連載の④の「神納橋から神居古潭まで(下)」では、神納橋下の左岸の砂原が、平林通恪が記録した、「幻のアイヌ語地名」の「ウタ(オタ)川岸の砂原」和人の訛表記「ウタ」であることを明確にした。さて、ワッソン一行は、六月八日に

断章 旭川のアイヌ語地名研究

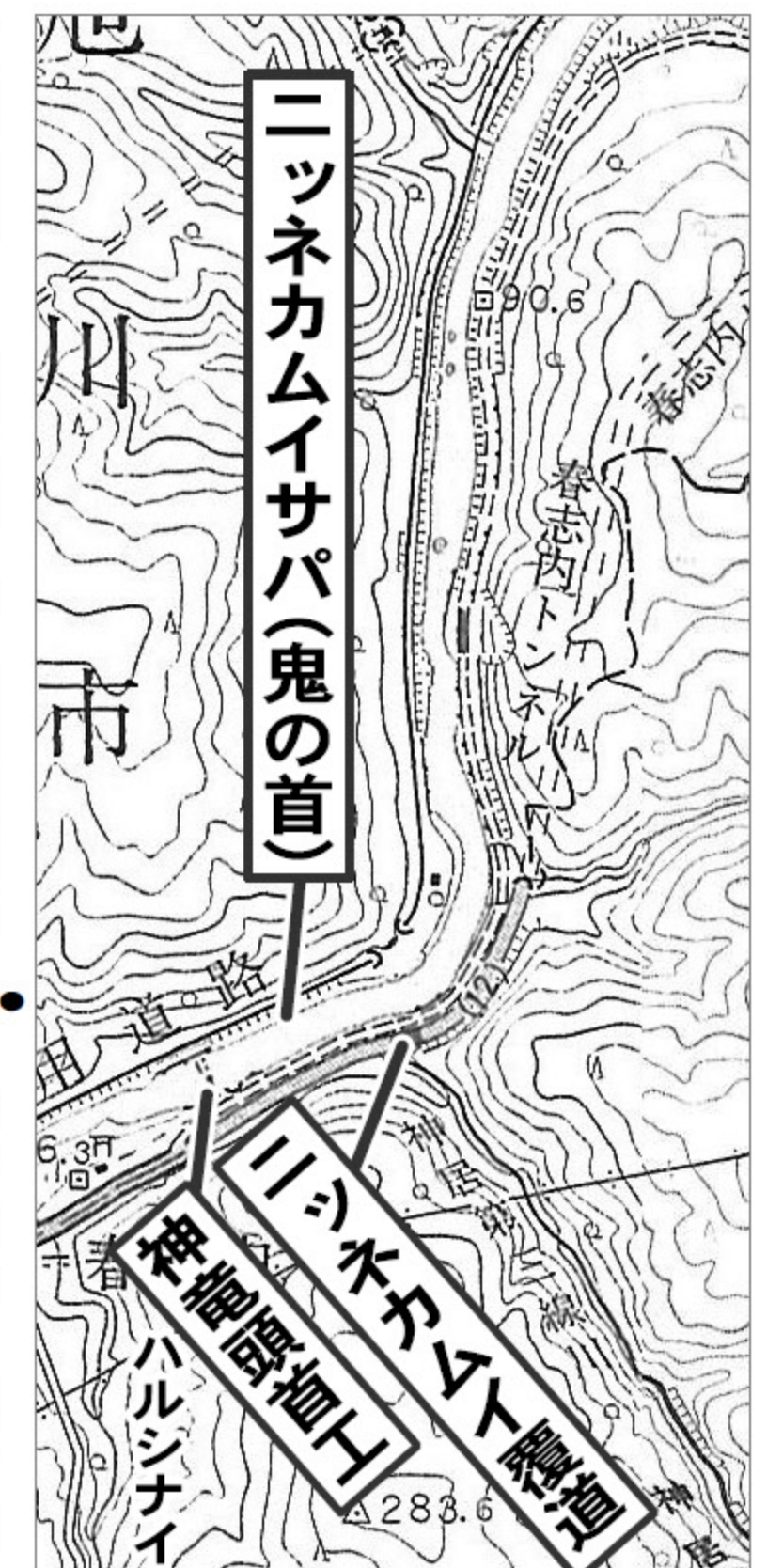
79

高橋 基

カムイコタンのワラモイに到着した。ワラモイは、パラモイ (para-moy 広い湾) のことで、以下、カタカナ表記の右傍点(ワラモイ)は、平林通恪のアイヌ語地名表記である。ここでは、ハルシナイまでの行程を見てみよう。
「六月八日、十町餘ワラモイ、此処ヨリ兩岸絶壁、奇石怪岩ノ間ヲ舟行ス。五町テシオマナイ(右小川)アリ、人ハ皆ワラモイ、ヨリ上陸シ荷物モ亦陸ヲ運



明治8年『北海道石狩川図』(部分)



ブ。道路アリ、岩上ヲ歩ス。此難所ヲカモイコタント云フ。アイヌ猛キモノ、危キモノ、貴キモノノ極ヲ、「カモイ」ト云フ。熊を「カモイ」、嶮阻ヲ「カモイコタン」、鮭ヲ「カモイチェプ」ト云フ類ナリ。

此テシオマナイハ難所ノ中間ニシテ川幅広ク方一町餘ノ池ノ如シ。其上ハ川流岩石ノ間ヨリ来リ、沫ヲ飛バセ水烟ヲ揚グ、其下ハ水声雷ノ如シ。之ヨリ十町ハルシナイニ至ル。此間貨物運搬ノ為メ、ハルシナイニ天幕ヲ張りテ泊ス。夜、丸木舟十三四隻キ上グルヲ見ル、誤リテ岩ニ触レ砕クルモノ二三アリ。

六月九日滞留。貨物ノ残り物ヲ運搬ス。正午出発、急流ヲ溯ル。

その後、ワッソン一行は、松浦武四郎も宿泊したチウベツトの番屋の傍にテント(天幕)を張り、ベースキャンプにして調査をする。しかし、基線に適する場所がなく、六月十三日に帰途についた。

ワッソンは、石狩川の正式測量のために、再び丸木舟で上川に入る。九月三日に札幌を出発し、測量を重ねて、

十月十二日にチウベツトの番屋の傍にテントを張った。ワッソン一行は、上川では、石狩川は愛別まで、美瑛川は辺別川まで測量する。その成果が、掲載図の『北海道石狩川図』(明治八年、開拓使地理課発行、縮尺二十六万六千八百分の一)で、近代的測量技術を用いた、上川地方最初の画期的な地図である。

ワッソンの調査中に、丸木舟の転覆事故が三度あった。愛別までの往路で二回、復路では、十月十九日、比布川の川口の少し上流の急流で、丸木舟四隻が次々転覆し、糧米・諸貨物を失った。また、上川から帰途も、ウタの手前で二隻が転覆した。

前回紹介した、高畑利宜も、明治六年九月に、イギリス陸軍軍医のホルトを、流星・銀河の滝に案内の出張命令を受けて随行した。しかし、暴風雨のため、層雲峡の手前で引き返した。その帰途、ホルト一行の乗っていた丸木舟が転覆し、ホルトの猟銃等携行品全部が川中に沈み、その引き上げのために一日滞在することになった。

これら丸木舟の転覆状況から、次回には、ハルシナイの地名解をもう一度検討したい。

(アイヌ語地名研究会幹事) ※毎月第1週号に掲載します